

2011 年度博士学位論文 要旨

老年期における死に対する態度と老いへの準備行動

桜美林大学大学院 国際学研究科 老年学専攻

針金まゆみ

# 目次

第1章 問題の提起と目的	2
1. 問題の提起	2
1) 老年期における発達課題	2
2) 死に対する態度	4
3) 死への準備教育	6
4) 老いへの準備行動	7
2. 目的	9
第2章 第1研究 老年期における死に対する態度尺度短縮版の信頼性ならびに 妥当性	10
1. 問題および目的	10
2. 方法	11
1) 対象	11
2) 測定尺度	11
3) 関連する変数	11
3. 結果	12
1) 死に対する態度尺度短縮版の信頼性	12
2) 死に対する態度尺度オリジナル版と短縮版の等質性	12
3) 死に対する態度と諸要因の関係	13
4. 考察	14
付記	16
第3章 第2研究 老年期における死に対する態度と老いへの準備行動との関連	17
1. 問題および目的	17
1) 問題	17
2) 目的	18
2. 方法	19
1) 対象と手続き	19
2) 測定尺度	19
3) 関連する要因	19
3. 結果	21
1) 老年期における死に対する態度の型	21
2) 老年期における死に対する態度の型と主観的幸福感との関連	21
3) 老年期における死に対する態度と老いへの準備行動との関連	21
4. 考察	24
1) 老年期における死に対する態度の型	24
2) 老年期における死に対する態度の型と主観的幸福感	24
3) 老年期における死に対する態度と老いへの準備行動	25
付記	27
第4章 総合的考察	28
おわりに	30
謝辞	31
文献	32
資料	36

## 第1章 問題の提起と目的

### 1. 問題の提起

#### 1) 老年期における発達課題

生涯発達の視点から，各年齢段階には発達課題が提示されており，老年期にも発達課題は提示されている．Havighurst<sup>1)</sup>は，老年期の発達課題として，肉体的な力と健康の衰退に適應すること，引退と収入の減少に適應すること，肉体的な生活を満足に送れるように準備することとともに，配偶者の死に適應することを発達課題として挙げている．

また，Newman ら<sup>2)</sup>は，身体的な適應，社会的な適應のほかに，死に対する見方の発達を挙げている．ここでいう死に対する見方を発達させるためには，自分自身の死を受け入れる能力と同時に親しい親戚や友人の喪失を吸収しうる能力が必要となるとされており，また，いかに死ぬかという新たな問題についても提示されている．

さらに，Erikson ら<sup>3)</sup>は，8つの心理社会的発達段階を提言したが，晩年，第9の発達課題として「死に向かって成長すること」を設定しようとしたとされている．この第9段階の課題は，第8段階までとは異なり，その前の段階での課題達成が必要であるとは考えられていない．反面，第9段階では以前に解決された危機ともう一度対峙することになるとされている<sup>3, 4)</sup>．このように，老年期を含めた生涯教育としての死への準備教育が必要であるといえるであろう．

老年期における死への準備教育の必要性が指摘されている一方で，その実証研究が行われていないということは，高齢者への介入の困難さに起因していると考えられる．すなわち，死に関するテーマに関心を持つ高齢者への教育は実施しやすいのに対し，関心を持たない高齢者への教育が実施しにくいためであると考えることができよう．そのため，死への準備教育への参加が有効と考えられる高齢者と，その他の高齢者を分類する必要があると考えられる．そこで，本研究では，高齢者の分類に加えて，介入方法の選択肢を増やすために，死への準備だけではなく，老いに伴う変化への準備を促す介入方法の可能性について探ることとした．

#### 2) 死に対する態度

本研究では，高齢者に対して死への準備教育を行う前段階として，死への準備教育による介入を行う高齢者を分類するための測度として，「死に対する態度」がふさわしいと考えた．なぜなら，死への準備状況を測度とする方法では，質問による介入効果が懸念され，介入群だけではなく，対照群においても死への準備が促進される可能性があるためである．一方で，死への準備教育は，最終的に対象者の主観的幸福感を高めることを目標として行われると考えることもできる．そのため，主観的幸福感を死への準備教育の測度とする方法も考えられる．しかしながら，主観的幸福感の高低による分類は可能であるものの，死への準備教育の影響以外の要因の制御が困難であり，測度として使用することは困難であるといえる．

Gesser ら<sup>15)</sup>の死に対する態度尺度は、死に対する不安・恐怖とともに多次元的に死の受容を測定できるため、本研究の目的にかなうと考えられた。しかしながら、老年期において死に対する態度を測定するためには、尺度をより簡便化する必要がある。

### 3) 死への準備教育

日本において死への準備教育に先駆的に取り組んできたデーケン<sup>26-28)</sup>は、フランスの「別れは小さな死」ということわざを紹介し、愛する人の死が、遺された人にとっても自己の一部が失われるという小さな死のような体験となることを指摘している。そのため、死別後のグリーフケアのみならず、ターミナルケアにおいて家族等の近親者に対し、死別後の悲嘆を見越したケアの必要性を説いている。この「小さな死」については、平山<sup>29)</sup>も言及している。一生の間に経験する喪失体験や挫折体験について「小さな死」として、幼児期から老年期まで発達段階別に示している。

高齢者に対する死への準備教育には、これら「小さな死」へのネガティブな反応を緩和するための事前準備を加える必要があると考えられる。そこで、本研究においては、老年期において経験しうる喪失体験へのこころの準備および備えるための行動を合わせて「老いへの準備行動」と定義した。

### 4) 老いへの準備行動

清水<sup>36)</sup>は、21世紀の超高齢社会に向けて個人がどのような準備活動をしておけば、幸福な老年期を過ごすことができるかを検討することを目的として、長野県内の60歳以上の老人大学学生に対し調査を行い、準備活動は子どもとの関係以外は直接幸福感に結びつくのではなく、不安が無い状態を経て幸福感に結びついていたことから、子どもとの良い人間関係を築き、経済と健康の準備を将来の生活に対して不安が減少するところまで行って、初めて幸福な老年期に結びついて行くと結論づけている。

この結論から、老年期までには清水のいう「明るい老後」のための準備を進め、老年期においては「暗い老後」のための準備も進める必要性が示唆される。すなわち、「暗い老後」の引き金となりうる、老年期において経験する可能性のあるさまざまな変化への準備について、自分自身の取り組みと重要な他者との話し合いという側面を探る必要があると考えられる。

## 2. 目的

本研究では、老年期における死に対する態度を評価し、その評価に基づいて類型化を行い、主観的幸福感および老いへの準備行動との関連を明らかにすることで、老年期における死に対する態度に介入するための方途を探ることを目的とした。なお、本研究の目的達成のために、本研究を第1研究と第2研究に分け、第1研究では、既存データを用いて、老年期における死に対する態度を評価するための尺度の短縮版を作成することとし、第2研究では、その短縮版の死に対する態度尺度を用いて、地域在住高齢者の死に対する態度を類型化し、主観的幸福感および老いへの準備行動との関連を検討することとした。

## 第2章 第1研究 老年期における死に対する態度尺度短縮版の信頼性ならびに妥当性

### 1. 問題および目的

がん告知，延命医療や尊厳死，ターミナルケアや緩和ケアなど，死に臨む際の生き方や死に方をめぐる問題に対する関心が高まっている<sup>39-43)</sup>．終末期には心肺蘇生処置，人工呼吸器装着，臓器提供に関する選択を通して，死に対する態度を問われる場面が増えてきている．

近年では，主観的健康感や生活満足度など高齢期の生活の質（quality of life）と死に対する態度の関連性を取り上げる研究が行われてきている<sup>44-46)</sup>．死に対する態度尺度を短縮することで，調査時に他の変数を加えるゆとりができ，他の概念との関連も検証しやすくなるといえる．さらに，少ない項目数で必要な情報を得ることによって，健康な高齢者だけでなく，より虚弱な高齢者も回答しやすくなることが期待でき，参加者の代表性もより高まることが期待できる．そこで，第1研究では，老年期における死に対する態度を簡便に測定できるよう，Gesserら<sup>15)</sup>が開発し，河合ら<sup>16)</sup>が日本語版を作成した死に対する態度尺度の短縮版を作成し，その信頼性ならびに妥当性を検討することを目的とした．

### 2. 方法

#### 1) 対象

第1研究では，東京都老人総合研究所の特別プロジェクト「中年からの老化予防総合的長期追跡研究（TMIG-LISA）」<sup>47-50)</sup>心理班による調査から得られたデータを使用した．本研究では，著者がTMIG-LISA心理班研究者の許諾を得て，1993年に実施した追跡調査で得られたデータを分析に用いた．3,075人が調査対象者であり，2,487人より回収し（回収率80.9%），有効票は2,482であった．なお，本研究では，59歳以下の者を除外し，60歳以上77歳以下の1,546人を最終的な分析対象とした．分析対象の内訳は，男性655人，女性891人であり，平均年齢は66.9（標準偏差＝4.68）歳であった．

#### 2) 測定尺度

Gesserらが作成し，河合らが日本語版を作成した死に対する態度尺度オリジナル版は21項目であった．各項目は「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5件法で評価され，5～1点を与えた．

#### 3) 関連する変数

死に対する態度に関連する変数として，性別，年齢，婚姻状況，過去1年間の死別経験の有無，主観的健康感，精神的健康を用いた．

### 3. 結果

#### 1) 死に対する態度尺度短縮版の信頼性

死に対する態度尺度の構造を確認するため、最尤法による因子分析を行い、因子軸の回転にはバリマックス回転を用いた。因子数は、Gesser ら、河合らの結果と同様であり、項目ごとの因子負荷量も Gesser らとほぼ同様の 4 因子構造がみられた。死に対する態度尺度の短縮版を構成するために、各項目がいずれかの因子に 0.40 以上の負荷量をもち、かつ他の因子に 0.20 以上の負荷量をもたない項目を下位次元ごとに 3 項目ずつ選択し、4 次元 12 項目からなる死に対する態度尺度短縮版を作成した。死に対する態度尺度短縮版の信頼性を検討するため、内的一貫性の指標として Cronbach の  $\alpha$  係数を下位次元ごとに求めた。その結果、死の恐怖が 0.60、積極的受容が 0.59、中立的受容が 0.52、回避的受容が 0.54 であった。

#### 2) 死に対する態度尺度オリジナル版と短縮版の等質性

死に対する態度尺度短縮版がオリジナル版と等質性を保っているかを検討するため、下位次元ごとに死に対する態度尺度オリジナル版と短縮版の相関係数を算出した。同一下位次元間の Pearson の積率相関係数は、死の恐怖が 0.86、積極的受容が 0.94、中立的受容が 0.92、回避的受容が 0.82 であった。

#### 3) 死に対する態度と諸要因の関係

4 つの下位次元得点の性差を検討した結果、死の恐怖、積極的受容、中立的受容の得点は、女性の方が有意に高かった。年齢差を 2 群で検討した結果、積極的受容、中立的受容、回避的受容の得点は、70 歳から 79 歳の群の方が高かった。配偶者と同居しているか否かで 2 群に分けて検討した結果、死の恐怖、回避的受容の得点は、同居していない方が高かった。過去 1 年間の死別経験の有無による違いを検討した結果、過去 1 年間に死別経験がある場合の方が死の恐怖の得点が有意に高かった。主観的健康感を独立変数として、一元配置分散分析を行った結果、死の恐怖と回避的受容において有意差がみられた。精神的健康について群間差を検討した結果、精神的健康が不良であるほど、死の恐怖と回避的受容の得点が有意に高かった。

### 4. 考察

本研究にて作成した老年期における死に対する態度尺度短縮版は、オリジナル版と同様の因子構造をしており、オリジナル版と比較して下位次元ごとの信頼性が十分に示され、死に対する態度尺度オリジナル版の短縮版として使用可能であることが確認された。死に対する態度尺度短縮版を用いることで、調査時の負担が小さくなり、今後は、健康な高齢者だけではなく、より虚弱な高齢者も回答しやすくなり、回答者の偏りが小さくなることを期待できる。より虚弱な高齢者に死に対する態度を尋ねられることで、これまで健康な高齢者から得られていた死に対する態度との比較が可能となる。さらには、縦断研究によって生活機能の変化と死に対する態度の変化を平行して検討していくことが可能となると期待できよう。

### 第3章 第2研究 老年期における死に対する態度と老いへの準備行動との関連

#### 1. 問題および目的

##### 1) 問題

本研究では、死に対する態度を形成する要因の一つとして、自立した生活を送る地域在住高齢者が、この先、直面する可能性のある出来事への準備の程度を取り上げる。この準備については、清水<sup>36)</sup>による、子どもとの良い人間関係を築き、経済と健康の準備を将来の生活に対して不安が減少するところまで行って初めて幸福な老年期に結びついて行くという結論に加え、針金<sup>54)</sup>が、尊厳死のイメージの一つとして他者との関係性を挙げている通り、高齢者一人で完結する準備だけではなく、他者との関係性に関する準備も必要であると考えられる。そこで、第2研究においては、地域在住高齢者において、老年期に直面する可能性のある出来事への準備の程度に加え、その出来事について重要な他者と話し合っている程度について、死に対する態度の類型との関連を検証した。

##### 2) 目的

第2研究では、第1研究で作成した死に対する態度尺度短縮版を用いて、地域在住高齢者の死に対する態度を類型化し、まず、その特徴を明らかにする。次に、死に対する態度の類型と主観的幸福感との関連から、死に対する態度の類型ごとの特徴と介入の必要性について検討する。そして、死に対する態度の類型と、死について考える頻度、老いへの準備行動との関連を検討することで、高齢者個々人の死に対する態度に適した死への準備教育や支援のあり方を検討することを目的とする。

#### 2. 方法

##### 1) 対象と手続き

2009年1月から2月、首都圏A県に在住する60歳以上の高齢者大学校在籍者男女822人を対象とし、講義時に調査票を配布した。自記式留置法にて事務局を介して766票を回収した(回収率93.2%)。なお、59歳以下の者を除外し、60歳以上で以下の測定尺度及び関連する要因に欠損のない602人を最終的な分析対象とした。分析対象の内訳は、男性299人、女性303人であり、平均年齢は66.5(標準偏差=3.89)歳であった。表10に分析対象者の基本属性を示す。

##### 2) 測定尺度

前章で開発した、老年期における死に対する態度尺度(DAP)短縮版(下位次元「死の恐怖」「死の積極的受容」「死の中立的受容」「死の回避的受容」)を用いた。

##### 3) 関連する要因

死に対する態度と関連する要因として、性、年齢、主観的経済状況、主観的健康感、主観的幸福感(PGCモラル・スケール)、死について考える頻度、老いへの準備行動の項目を設定した。

### 3. 結果

#### 1) 老年期における死に対する態度の型

死に対する態度における 4 つの下次元(「死の恐怖」「死の積極的受容」「死の中立的受容」「死の回避的受容」)得点を用いて、Ward 法による階層クラスタ分析を行った結果、4 つの型に分類された。

各型の特徴を明らかにするために、型を独立変数、分類に用いた死に対する態度の 4 つの下次元得点を従属変数として、それぞれ一元配置の分散分析を行った。その結果、死に対する態度の 4 つの下次元得点(死の恐怖、死の積極的受容、死の中立的受容、死の回避的受容)は、いずれも型間で有意な差がみとめられた。

型ごとにみると、第 1 型では死の恐怖と積極的受容と中立的受容が低く、第 2 型では積極的受容と回避的受容が高く、第 3 型では積極的受容と中立的受容が高く回避的受容が低く、第 4 型では死の恐怖が高く積極的受容が低いという特徴が示された。死に対する態度を分類したこれら 4 つの型の特徴から、第 1 型を「死に関心がない態度」、第 2 型を「死に近づこうとする態度」、第 3 型を「死を受け入れる態度」、第 4 型を「死を恐れる態度」とそれぞれ命名した。

#### 2) 老年期における死に対する態度の型と主観的幸福感との関連

死に対する態度の各型について特徴を明らかにするために、型を独立変数、性、年齢、PGC モラル・スケールの得点を従属変数として、それぞれ一元配置の分散分析を行った。その結果、各型で性と年齢に有意差はなかった。PGC モラル・スケール得点は、型間で有意な差がみとめられた。PGC モラル・スケールの得点を型ごとにみると、「死に関心がない態度」と「死を受け入れる態度」で高く、「死に近づこうとする態度」と「死を恐れる態度」で低かった。

#### 3) 老年期における死に対する態度と老いへの準備行動との関連

「死に関心がない態度」は、死について考える頻度が高くなかった。一方、ひとり暮らしの準備をしている、終末期についての準備をしている、意思表示できない状態についての準備をしている、葬儀について話し合っている、生きがいのための準備をしている、主観的な健康度が高いという傾向にあった。

「死に近づこうとする態度」は、4 つの型の中でもっとも死について考える頻度が高かった。一方、老いに関する準備や話し合いはしていない傾向にあった。

「死を受け入れる態度」は、死について考える頻度が高くなかった。一方、ひとり暮らしの準備をしている、終末期について話し合って準備もしている、意思表示できない状態についての準備をしている、葬儀について話し合っている、生きがいのための準備をしている、主観的な健康度が高いという傾向にあった。

「死を恐れる態度」は、死について考える頻度が高くなかった。また、老いに関する準備や話し合いはしていない傾向にあった。

#### 4. 考察

##### 1) 老年期における死に対する態度の型

以上から、老年期における死に対する態度は4つに類型化が可能であり、型ごとに特徴があることが明らかとなった。4つの型のうち、死を受容する態度は、「死に近づこうとする態度」および「死を受け入れる態度」であり、一方、死を受容しない態度は、「死に関心がない態度」および「死を恐れる態度」であることが示された。このことから、死を受容する態度には2種類あることが示唆された。死の受容の観点からみると、全体の7割が死を受容し、3割が死を受容していないということが明らかとなった。死を受容している高齢者に限定してみると、4人に3人は「死に近づこうとする態度」であり、4人に1人が「死を受け入れる態度」であることが示された。

##### 2) 老年期における死に対する態度の型と主観的幸福感

死を受容する態度は、「死に近づこうとする態度」および「死を受け入れる態度」であった。「死に近づこうとする態度」は、主観的幸福感が低く生から逃れるために、死に近づこうとする態度であり、この態度は、死を受容しているものの、生を受容しているとは言い難い。次に、「死を受け入れる態度」は、死への恐怖を克服し、死を受容しながら、主観的幸福感を高く保っている態度と推察される。主観的幸福感が高いことから、死を受容するとともに、生も受容している態度であることが示唆される。

他方、死を受容しない態度は、「死を恐れる態度」および「死に関心がない態度」であった。「死を恐れる態度」は、死を恐れている態度であり、この態度は、死への準備教育の初期や近親者との死別、自分自身の身体機能や認知機能の変化によって、死を意識し始め恐怖を感じている段階と考えられる。最後に、「死に関心がない態度」の高齢者の主観的幸福感が高い理由として、2つの可能性が考えられる。死を意識しないことで主観的幸福感を高く保てられる可能性と、死について意識する必要がないほど老年期に経験する喪失体験と今のところ縁がないことで、主観的幸福感を高く保っている可能性である。

##### 3) 老年期における死に対する態度と老いへの準備行動

老年期における死に対する態度の4つの型は、老いへの準備行動との関連においても型ごとに異なっていた。老いへの準備行動は、死を受容しているか否かよりも、主観的幸福感の高さと関連していると考えられた。しかしながら、老いへの準備行動について話し合いの程度と自分自身の準備の程度を分けて検討すると、「死に関心がない態度」の高齢者は、自分自身の準備の程度に対して話し合いの程度が「死を受け入れる態度」の高齢者よりも小さい。このことから、「死に関心がない態度」の高齢者の準備の程度が高い理由として、死への準備とは異なり、日常生活におけるさまざまな活動への積極性の現れと考えることができるであろう。一方、「死を受け入れる態度」の高齢者の話し合いの程度が高い理由として、死を受容することで、死への準備の一環として、老いへの準備行動が促されている可能性が考えられる。

## 第4章 総合的考察

本研究の第1研究において、老年期における死に対する態度尺度短縮版を開発し、この4つの下位次元からなる短縮版の信頼性と妥当性を確認することができた。これにより、高齢者の死に対する態度を4つの側面から比較的少ない項目で測定できるようになった。

この死に対する態度尺度短縮版を用いることで、第2研究では老年期における死に対する態度を4つの側面から測定でき、その4つの得点に基づいて、死に対する態度を分類することが可能となった。分類の結果、4つの型が見いだされ、それぞれ、「死に近づこうとする態度」「死を恐れる態度」「死を受け入れる態度」「死に関心がない態度」と命名された。

4つの型それぞれの特徴から、高齢者個々人の死に対する態度を把握するためには、各得点のプロフィールを描くよりも、各得点の高低の組合せによる態度の型を捉えることが有用であることが示唆された。

これら死に対する態度の4つの型については、死を受容しているか否かという観点から、さらに2つに分類し、主観的幸福感との関連を検討した。死の受容は、死への準備教育の目標として掲げられるものである。しかし、死を受容していても、その受容が「死に近づこうとする態度」である可能性が明らかとなり、この態度の高齢者の主観的幸福感が低いことが確認された。本研究において、「死に近づこうとする態度」を持つがゆえに幸福感が低いのか、幸福感が低いために「死に近づこうとする態度」を持つのかという因果関係については検証できていない。しかしながら、これらの関連が示されたことにより、死への準備を行う高齢者の主観的幸福感を確認する必要性が示唆されたといえるであろう。

今後の課題として、より高齢な高齢者や地域在住高齢者や施設に入居する高齢者を対象に研究を行う際には、生活機能との関連を検討していく必要がある。加えて、本研究で得られた成果をもとに、高齢者に対して老いへの準備行動を促す介入を行い、死に対する態度の形成・変容過程について、実証的に明らかにしていく必要があるといえるであろう。

以上、本研究の結果から、老年期の死に対する態度は4つに分類できた。そのうち死を受容する態度には、2つの型があることが示され、「死を受け入れる態度」の他に「死に近づこうとする態度」の存在が明らかとなった。このような態度の高齢者が、尊厳死を望み、リビング・ウィルを書いたとして、この高齢者の周囲の人たちがすべきことは、その意思を尊重することではなく、うつ状態を疑い専門家に相談することであると考えられる。死を受け入れている高齢者において、もし死を生から回避するための手段として受容している場合には、その高齢者の死は尊厳死とは呼ばず、自死あるいは自殺と呼ばれうる死となると考えられる。このような、尊厳死を目指した自死を防ぐためには、終末期医療に関する本人の意思だけでなく、並行して死に対する態度を多次元的に評価しておく必要があるといえ、さらには、周囲の大切な人との話し合いを通じて、死に対する態度を変容させていくことが望まれる。

## 文 献

- 1) ハヴィガースト RJ 荘司雅子監訳：人間の発達課題と教育．玉川大学出版部，東京（1995）．
- 2) ニューマン BM ,ニューマン PR 福富護訳：新版生涯発達心理学 川島書店 ,東京(1988) ．
- 3) Erikson, EH, Erikson, JM: The life cycle completed: A review. Expanded Edition. エリクソン, EH, エリクソン, JM : ライフサイクル, その完結 増補版 (村瀬孝雄, 近藤邦夫 (訳), みすず書房, (2001)), Norton, New York (1997) ．
- 4) 増井幸恵：性格 (朝倉心理学講座 高齢者心理学．権藤恭之編), 朝倉書店：134-150(2008) ．
- 5) 關戸啓子：生涯教育としてのデス・エデュケーションの必要性 川崎医療福祉学会誌．9(1)：61-68 (1999) ．
- 6) 厚生労働省：政策レポート．<http://www.mhlw.go.jp/seisaku/2010/01/01.html> , (2010.1.18 公開)
- 7) 吉田浩二, 相田一郎, 望月吉勝, 福山裕三：健康な老人に対する死への準備教育．日本公衆衛生学会誌．39(6)：355-360 (1992) ．
- 8) 石井京子：高齢者への死の準備学習を促進するプログラムの実践活動．ヒューマン・ケア研究．(9)：53-63 (2008) ．
- 9) Lipman A, Marden PW: Preparation for death in old age. Journal of Gerontology, 21: 426-431(1966).
- 10) Wolff K: Personality type and reaction toward aging and death: a clinical study. Geriatrics, 21(8): 189-192(1966).
- 11) Templer DI: The construction and validation of a Death Anxiety Scale. The Journal of General Psychology. 82: 165-177 (1970).
- 12) Thorson JA, Powell FC : A revised death anxiety scale. Death Studies, 16(6)(1992).
- 13) Spilka, B., Stout, L., Minton, B., & Sizemore, D. (1977). Death and personal faith: A psychometric investigation. Journal of the Scientific Study of Religion, 16, 169-178.
- 14) 金児暁嗣：大学生とその両親の死の不安と死観．人文研究大阪市立大学文学部紀要，46：1-28(1994) ．
- 15) Gesser G, Wong PTP, Teker GT: Death attitudes across the life span: Development and validation of the Death Attitude Profile. Omega. 18(2): 113-28 (1987).
- 16) 河合千恵子, 下仲順子, 中里克治：老年期における死に対する態度．老年社会科学．17(2): 107-116 (1996).
- 17) Wong TPT, Reker GF, Gesser G: Death Attitude Profile – Revised: A multidimensional measure of attitudes toward death . In R. A. Neimeyer (Ed.), Death anxiety handbook:

- Research, instrumentation, and application (pp. 121 – 148 ). Taylor & Francis, Washington, DC ( 1994 ).
- 18) 隈部知更：DAP-R 日本語版の内容的妥当性—死への態度と信仰の関係．心理臨床学研究，20(6)：601-607(2003)．
  - 19) 坪井さとみ,新野直明,安藤富士子,藤本よし子,齊藤伊都子,加藤美羽子,下方浩史:高齢者の入院または死が家族の「死への不安」に及ぼす影響.家族看護学研,8(2):181-187(2003).
  - 20) 針金まゆみ，河合千恵子，増井幸恵，岩佐一，稲垣宏樹，権藤恭之，小川まどか，鈴木隆雄:老年期における死に対する態度尺度(DAP)短縮版の信頼性ならびに妥当性．厚生学指標．56(1)：33-38 (2009)．
  - 21) Conte HR, Weiner MB, Plutchik R: Measuring death anxiety. Journal of Personality and Social Psychology. 43: 775-785 (1982).
  - 22) 藤田綾子：高齢者と適応．ナカニシヤ出版，京都(2000)．
  - 23) Watts PR: Evaluation of death attitude change resulting from a death education instructional unit. Death Education,1(2): 187-193(1977).
  - 24) Knight KH, Morton H: Relationship of death education to the anxiety, fear, and meaning associated with death. Death Studies, 17(5): 411-425(1993).
  - 25) Davis-Berman J: Attitudes toward aging and death anxiety: Aging and death class, Omega, 38(1): 59-64(1998-1999).
  - 26) デーケン A：死を教える（＜叢書＞死への準備教育；第1巻）．メヂカルフレンド社，東京(1986)
  - 27) デーケン A：死とどう向き合うか．日本放送出版協会，東京(1996)．
  - 28) デーケン A：よく生きよく笑いよき死と出会う，新潮社，東京(2003)．
  - 29) 平山正実：死生学とはなにか，日本評論社，東京(1991)．
  - 30) 高橋久美子：定年退職後の夫婦適応，社会老年学，(13)：21-35 ( 1980 )．
  - 31) 角隆司：老後生活の不安に関する研究．福岡大学総合研究所報，( 128 )：1-29( 1990 )．
  - 32) 有園博子，森田展彰，松崎一葉，簀下成子，吉川麻衣子，佐藤親次：中高年における心理的要因の変化 - 退職期前後を中心として - ．日本社会精神医学会雑誌，7(2)：141-151 ( 1998 )．
  - 33) Kubota M, Babazono A & Aoyama H: Women's anxiety in old age and long-term care provision for the elderly. Acta medica Okayama. 54(2): 75-83 (2000).
  - 34) 福間和美，大西早百合，岡山寧子，小松光代，佐藤卓利，阿部登茂子，谷垣静子：中高年におけるサクセスフルエイジングに向けての準備行動とその要因に関する研究．県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要，3：67-83 ( 2002 )．
  - 35) 平岡公一：老後に向けての準備行動における高齢者の主体性--東京都港区夫婦のみ世帯高齢者調査からの検討．明治学院論叢，(476)：305-329 ( 1991 )．

- 36) 清水妙子：老年期に向けての主体的準備活動．仏教大学大学院紀要，(29)：115-128 (2001)．
- 37) 小田利勝：いまの高齢者は老後の準備を何歳頃に始めたか．神戸大学発達科学部研究紀要，11(1)：161-172 (2003)．
- 38) 古谷野巨：主観的幸福感の測定と要因分析 - 尺度の選択が要因分析におよぼす影響について - ．社会老年学，(20)：59-64 (1984)．
- 39) Csikai EL, Manetta AA: Preventing unnecessary deaths among older adults: A call to action for social workers. *Journal of Gerontological Social Work*. 38(3): 85-97 (2002).
- 40) 島田千穂，近藤克則，樋口京子，本郷澄子，野中猛，宮田和明：在宅療養高齢者の看取りを終えた介護者の満足度の関連要因—在宅ターミナルケアに関する全国訪問看護ステーション調査から．厚生指標．51(3): 18-24 (2004).
- 41) McDonald DD, Deloge JA, Joslin N, Petow WA, Severson JS, Votino R, Shea MD, Drenga JM, Brennan MT, Moran AB, Del Signore E: Communicating end-of-life preferences. *Western Journal of Nursing Research*. 25(6): 652-666 (2003).
- 42) Fairrow AM, McCallum TJ, Messinger-Rapport BJ: Preferences of older African-Americans for long-term tube feeding at the end of life. *Aging & Mental Health*. 8(6): 530-534(2004).
- 43) 日置敦巳，田中耕，和田明美：勤労世代男女の死生観と終末期のケアへの期待. 厚生指標．52(3): 19-23 (2005).
- 44) Lang FR, Baltes PB, Wagner GG. Desired lifetime and end-of-life desires across adulthood from 20 to 90: a dual-source information model. *Journals of Gerontology: Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*. 62B(5): 268-6 (2007).
- 45) Sullivan M, Ormel J, Kempen GI, Tymstra T: Beliefs concerning death, dying, and hastening death among older, functionally impaired Dutch adults: a one-year longitudinal study. *Journal of the American Geriatrics Society*. 46(10): 1251-7 (1998).
- 46) Lockhart LK, Bookwala J, Fagerlin A, Coppola KM, Ditto PH, Danks JH, Smucker WD: Older adults' attitudes toward death: links to perceptions of health and concerns about end-of-life issues. *Omega*. 43(4): 331-347 (2001).
- 47) 下仲順子，中里克治，河合千恵子，佐藤眞一，石原治，権藤恭之：中高年期におけるライフイベントとその影響に心理学的研究. 老年社会科学. 17: 40-56 (1995).
- 48) Shimonaka Y, Nakazato K, Kawai C, Sato S, Ishihara O, Gondo Y: The effect of life events on psychological well-being among Japanese middle-aged and elderly. In: Shibata H, Suzuki T, Shimonaka Y, eds. *Facts research and intervention in geriatrics 1997 Longitudinal Interdisciplinary Study on Aging*. Paris: Serdi Publisher, 137-146 (1997).
- 49) 岩佐一，権藤恭之，増井幸恵，稲垣宏樹，河合千恵子，大塚理加，小川まどか，高山緑，藺牟田洋美，鈴木隆雄：日本語版「WHO-5 精神的健康状態表」の信頼性ならびに妥当性—地域在住高齢者を対象とした検討. 厚生指標. 54(8): 48-55 (2007).

- 50) Iwasa H, Masui Y, Gondo Y, Inagaki H, Kawaai C, Suzuki T: Personality and all-cause mortality among older adults dwelling in a Japanese community: a 5-year population-based prospective cohort study. *American Journal of Geriatric Psychiatry*. 16(5): 399-405 (2008).
- 51) 中川泰彬, 大坊郁夫: 日本版 GHQ 精神健康調査票手引. 東京: 日本文化科学社, (1985).
- 52) 福西勇夫: 日本版 General Health Questionnaire の cut-off point. *心理臨床学研究*. 3: 228-234 (1990).
- 53) Tate LA: Life satisfaction and death anxiety in aged women. *International Journal of Aging and Human Development*. 15: 299-306 (1982).
- 54) 針金まゆみ: 尊厳死とその関連用語に対するイメージの分析 - 日本における尊厳死の位置づけの明確化を目指して - . 桜美林大学大学院修士論文 ( 2005 ).
- 55) Lawton MP: The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale; A revision . *Journal of Gerontology*. 30(1): 85-89 (1975).
- 56) 前田大作, 野口裕二, 玉野和志, 中谷陽明, 坂田周一, Jersey Liang: 高齢者の主観的幸福感の構造と要因 . *社会老年学* . 30: 3-16 ( 1989 ).
- 57) Lawton MP: The dimensions of morale. In D.kent, R.Kastenbaum, & S.Sherwood(Eds.), *Research, planning and action for the elderly*. Behavioral Publications, New York (1972).
- 58) Morris JN, Sherwood S: A Retesting and Modification of the Philadelphia Geriatric Center Moral Scale, *Journal of Gerontology*. 30: 77-84 (1975).
- 59) 前田大作, 浅野仁, 谷口和江: 老人の主観的幸福感の研究 - モラル・スケールによる測定を試み - . *社会老年学* . 11: 15-31 ( 1979 ).
- 60) 厚生労働省: 第 1 回 終末期医療のあり方に関する懇談会 資料 3 .  
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/10/dl/s1027-12e.pdf> ,( 2008.10.27 ).
- 61) 針金まゆみ, 長田久雄: 老年期における死に対する態度の類型化の試み . *日本老年社会科学会第 52 回大会報告要旨集* . 32(2) : 214 ( 2010.6.17 ).